キズナエピソード

槍水りり　3話

//ヴィジュアルノベル形式開始

//とびお自室

その日は、大雨注意報がでていた。

家の中に、雨が窓に叩きつけられる音が響いていた。

そんな音の中、

ピンポーン、とインターホンの音が鳴る。。

通販とかしたっけな？

そんなことを考えながら、俺は玄関へと急いだ。

//次ページ

扉を開けると、

びしょ濡れになったりりが立っていた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//とびおの家・玄関

［りり］

「あはは、突然ごめんね」

［とびお］

「おい、お前どうしたんだよ！

ずぶ濡れじゃないか！

どうした？　何かあったのか？」

［りり］

「ねぇ、とびお……今日、泊めて？」

［とびお］

絞り出されるように出てきた声は、真剣だった。

だから俺は、それ以上は何も聞けなくなってしまう。

［とびお］

「わかったから、とにかく中に入れ。

このままじゃ風邪引くぞ。

待ってろ、今タオル持ってくるから」

［とびお］

俺は洗面所から新しいハンドタオルを持ってくると、

りりに手渡した。

水気を取ってもらったあとで、浴室に案内する。

//とびおの家・浴室

［とびお］

「とりあえず、服は後で洗っておくから、

洗濯機の中に突っ込んどいて。

着替えは俺の服持ってくるから、ひとまずそれ着て」

［とびお］

「お湯の温度は、ボタンで調整できるから。

ボトルの中身がピンク色のがボディーソープで、

白いのがシャンプー……だったはず」

［りり］

「うん、わかった……。

とびお、ありがとう」

［とびお］

「……体、しっかり温めろよ」

［とびお］

これ以上、浴室に男女が二人きりというのも気まずい。

俺は言うだけ言って出ていくことにする。

//とびおの家・リビング

［とびお］

そして、しばらくして。

体を火照らせたりりが、リビングへとやって来た。

［りり］

「着替え、これ使ってよかったの？」

「とびお］

「ああ。明日までには乾かすから、

今日一日はそれで我慢してくれ」

［りり］

「ありがと。これ、とびおの服だよね」

［とびお］

「まぁな。でも、洗濯してるからキレイなはずだぞ」

［りり］

「あははっ。そこは気にしてないよ。

……でも、ちょっと大きいね」

［とびお］

「当たり前だろ。俺の家には男物しか無いんだから。」

［とびお］

ジャージの上下は貸せても

女物のパンツはない。ブラジャーなんて論外だ。

［とびお］

だから、目の前のりりは現在ノーブラ、ノーパン。

服一枚隔てた向こう側は、ハダカ。

そのことを考えてしまうと、妙にドキドキする。

［りり］

「気になる？」

［とびお］

そんな考えを見透かしたかのように、

りりは俺の顔を覗き込んできた。

［とびお］

「な、何言ってるんだよ」

［とびお］

動揺を見透かしたかのように、

りりは上目遣いで俺の顔を覗き込んできた。

［りり］

「……したい？」

［とびお］

「そういうんじゃない」

［とびお］

俺は理性を保つので精一杯だった。

//◆18禁版の場合Rシーンへ

//暗転

［とびお］

そして、翌朝。

［りり］

「おはよう……」

［とびお］

「おぅ、おはよう。

着替え、枕元に置いといたんだけど、わかったか？

朝飯もできてるぞ。食べるだろ？」

［りり］

「……うん」

［とびお］

俺は自慢の料理の腕をりりに振る舞った。

とは言え、朝食は和やかな雰囲気とは程遠く、

互いに黙々と食べていく。

［りり］

「……なんで何も聞かないの？」

［とびお］

しばらくして、りりがボソリと言葉を漏らした。

［とびお］

「何にも言いたそうじゃないから」

［とびお］

そんなりりにぴしりと言い放つ。

ビクッと震えた彼女に向けて、

俺はため息を一つついてから笑いかけた。

［とびお］

「言いたくなったら聞いてやるから、

いつでも俺のとこに来い。

その代わり、今度から来る前には連絡よこせよ」

［りり］

「……うん」

［とびお］

「ほら、食べたらちゃんと学校行くぞ。

俺はこれ以上遅刻したらヤバイんだ。

生徒指導のタミヤに殺されるっ」

［りり］

「あははっ……。

それはとびおの日頃の行いのせいじゃないの？」

［とびお］

りりの顔からようやく笑顔がこぼれた。

俺は胸をなでおろすと、

彼女と一緒に家を出たのだった。

//ADV形式終了

//3話エンド